

【2026 ワールドカップ・タシケント大会】

開催日：2026年4月9日～11日

開催地：ウズベキスタン・タシケント

ワールドカップシリーズ第2戦となるタシケント大会が開幕した。本大会には39か国から個人71名、団体14チームが出場。

個人には、ナショナル個人強化選手の松坂選手、鶴田選手が、団体はフェアリージャパンが出場する。

個人は出場選手数が増加する中で競争も一層激化しており、各国がランキング獲得に向けて積極的に参戦する状況となっている。限られた試技機会の中で、いかに完成度の高い演技を発揮し、得点を積み重ねるかが求められる大会である。

団体においては、前大会と比較すると出場チーム数は減少しているものの、ソフィア大会に出場していなかった国も加わることで、本大会は今シーズンにおける各国の実力や強化の方向性を把握する上で重要な位置づけとなる。

【個人：鶴田芽生】

《1種目目：リボン》

得点：24.650（DB 6.20／DA 3.40／A 7.80／E 7.25）

初戦ということもあり、やや緊張した様子が見られたが、演技全体としては一つひとつの要素を落ち着いて判断しながら取り組む姿勢が見られた。

一方で、エカルテターンのプレバレーションにおいてリボンが足に触れた影響から、軸に乗り切れない場面が見られた。また、座位でのブーメランにおけるキャッチでは、床で押さえる形となり、スムーズな実施に課題が残った。

全体を通して音楽に対するわずかな遅れが積み重なり、途中でDAを抜く判断となったほか、終盤のリスクにおいては投げが真上となったことで回転数を調整して実施する形となり、十分な加点を得ることができなかった。

細部の精度および音楽との一体感を高めていくことが今後の課題として挙げられる内容であったが、鶴田選手の歯切れの良さとスピード感のある演技は、ワールドカップという国際舞台においても非常に印象的であり、今後の強化において大きな武器となることが期待される。

《2種目目：クラブ》

得点：23.450 (DB 4.90/DA 3.90/A 7.65/E 7.00)

前日のポディウム練習において感じていた照明への意識が影響し、演技開始直後のリスクにおいて投げ自体は良好であったものの、手で弾く形となり落下につながった。

また、苦手としている足蹴りのリスクにおいても投げが真上となり回転を伴う実施ができず回避する判断となったほか、フェッテバランスではホップ移動が入ったことで難度が成立せず、得点の取りこぼしが見られた。

全体として、得点源となるリスクにおける精度不足および加点の取りこぼしが得点に大きく影響した内容であり、国際大会における得点の積み上げという観点で課題が明確となった。

今後は、リスクにおける投げの質や回転の実施率を高めるとともに、要素の精度と安定性を向上させ、持ち点を確実に得点へとつなげる演技の構築が重要である。

【個人：松坂玲奈】

《1種目目：クラブ》

得点：23.500 (DB 5.50/DA 3.60/A 7.45/E 6.95)

身体の動きは非常に良く、音楽に乗った表現力豊かな演技が見られた。特に、曲を生かした緩急のある動きはこれまで以上にレベルアップしており、ダイナミックチェンジも明確で、演技全体として非常に分かりやすく表現されていた。

一方で、3つ目のリスク（価値 0.9）において投げが小さくなり、回転を断念してキャッチしたためノーカウントとなった。また、ラストのリスク（価値 0.9）では投げが大きくなり落下となり、難度価値の損失に加え落下減点も含め、合計で約3点弱の失点となった。

新しい構成であることから、通し込みや実戦経験の不足が精度に影響した部分はあるものの、現時点でも国際舞台で十分に戦える内容が含まれている。今後はリスクにおける投げの精度と再現性を高め、各要素を正確に実施することで、持ち点を確実に得点へとつなげていくことが重要である。

《2種目目：リボン》

得点：25.350 (DB 7.30/DA 3.60/A 7.30/E 7.15)

落下を防ぎながら演技をまとめることはできたものの、フェッテピボットの途中でリボンが足に絡みかけた影響により、その後の難度がノーカウントとなった。

さらに、終盤のリスクキャッチからフィニッシュにかけて動きに停滞が見られ、0.3のDAを省略する形となり、得点の取りこぼしにつながった。

本日の2種目はいずれも新しい構成であり、現時点では精度や安定性に課題が見られるものの、戦える要素は十分に備わっている。今後は各要素の正確性と演技全体の完成度を高めることで、得点へと確実につなげていくことが求められる。

【団体】

《1種目目：ボール5》 2位

得点：26.100（DB 5.10／DA 6.40／A 7.50／E 7.10）

ソフィア大会終了後、そのまま現地に滞在し、1週間の海外合宿を経て本大会に臨んだ。チーム内には連戦を初めて経験するメンバーも多く、疲労を含めたコンディション調整の難しさも見られたが、前回大会の反省を踏まえ、「和の曲の世界観を表現すること」および「一つ一つの技を確実に実施すること」を目標に臨んだ。

演技全体としては、やや投げの乱れが見られたものの、「絶対に落とさない」という強い意志が感じられる内容であった。

ダイブロールを伴うCRでは、投げの乱れによりキャッチのフォームが崩れ実施減点が生じたが、手具を押さえ落下を防ぐことができた。また、続くCRにおいても背面受けの直後にボールがこぼれる場面があったが、瞬時に受け止め、冷静に対応することができた。複数箇所において受けの価値を取りきれない場面や、投げの軌道に不安定さが見られたものの、そのような状況においても最小限の移動で対応できた点は評価できる。また、日本チームの強みである動きの同時性は、本大会においても引き続き評価されている。

本大会においては各国ともにミスが見られる中、落下の有無が順位に直結し、ミスなくまとめたチームが上位を占める結果となった。そのような中で、日本チームは不正確な実施が見られる場面がありながらも、落下を防ぐ対応力を発揮し、最後まで演技をつなぎ切ることができた点は大きな収穫である。

現時点でも国際舞台において戦える要素は十分に備わっており、今後は投げの軌道の安定性と受けの精度を高め、各要素を確実に成立させることで、持ち点を着実に得点へとつなげていくことが重要である。加えて、ミスを恐れず挑戦し続ける姿勢は着実に成長しており、今後、熟練度を高めていくことで、精度と安定性を兼ね備えた演技へと発展していくことが期待される。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

眞鍋凜

Live results link:

<https://www.sportvokrug.com/sports/rg/event/14878/results/>